

# 空と草と

和田陽平

## 空

私は横浜に生れて、育った。今の野毛山公園の、もう一つ裏の山に当る所で、当時は西戸部町字山王山といった。山王山という高台の原っぱがあり、大きな松が何本か生えていて、昔は山王様を祭った小さな祠があったそうである。東の端の檜の木に昇ると、遠くに港の海が見えた。

或る夏の夕暮時、幼い姉と私は、この原っぱに並んで、西の空を眺めていた。遠い笹原の彼方、地平線には夕映の茜色が残っていて、丹沢の山並の輪郭が黒く見えた。

お日様西にかくれて

宵の明星顔出した

あっちの方にもピーカリ

こっちの方にもピーカリ

出てくる出てくる星の数

二人で、こんな歌をうたった。出てくる出てくる星の数。

遠い昔、横浜の空にも、降るように輝く、無数の星が見られた。

## 草

夕飯後に、父と母は幼い私達兄弟を連れて、よく散歩に出た。山王山の家から、税関官舎の脇を通って、伊勢山の切通しから野毛坂を下り、伊勢佐木町まで歩いて行く。切通しの坂には青白い瓦斯燈が灯っていた。

当時、横浜の唯ひとつの盛り場であった伊勢佐木町には、いくつかの活動写真館もあった。滅多に活動写真を見ない父は、或る時、ふと気を変えたか、散歩の途中で、私達を連れて、記念電気館という名の活動小屋に入った。亀柴せいべいの反対側の横町を一寸入った角のところに在ったが、今はもう、とうの昔に跡形もない。

その時に見た写真は『細川血達磨』という芝居で、火事のなかでお侍が腹を切るといふ、世にも恐ろしい光景を、入った途端に見た幼い姉と私は、仰天して、わっと泣き出し、困り果てた父は二人を裏の廊下に連れ出した。

廊下の窓から下の往来を見下したら、夜の植木市が立っていた。アセチレン瓦斯の光に照り映えたゼラニウムの朱色や淡紅色の花は、泣いたあとの眼に、妖しく鮮やかに見え

た。

今でも、ゼラニウムを見るたびに、不思議にその時のことを思い出す。

## 空と草と

中学を卒業すると、私は遠い伊予の松山の高等学校に入った。松山は漱石の坊ちゃん土地であり、学校は松山の町と、道後温泉の中間の、田圃のなかに在った。学校の近くの石手川のはとりには、晩春ともなれば、ニセアカシヤが白い花房を、枝もたわわに咲かせた。四国八十八箇所の札所である石手寺の、古い山門の脇では、焼き大福を売っていた。学校のグラウンドにはシロバナタンポポが咲き、ニワセキシヨウー南京あやめーの小さい花が一面に春風に揺れ、そら豆ほどの大きさの雨蛙が飛び跳ねた。要するに大変のどやかな風景ということである。

学校で、私の一番気に入りの場所は、植物園と称する、芝生の間に花壇のある所であった。花壇には浜菊、金盞花、飛燕草、矢車菊など、さまざまの花が咲いたが、幼い頃、私の

家の庭に咲いていたナスターシャムも咲いていた。和名のノウゼンハレンは、花がノウゼンカズラに似て、葉が蓮の葉のように丸いからである。芽は食用になるそうだが、私は試みたことがない。葉を千切ると独特の青臭い匂いがあり、それを嫌う人もあるが、私にはそれが何とも懐しい。幼い時を思い出すからである。ものの匂いほど、昔の記憶を呼び起すものはないのではなからうか。

私はその芝生に寝そべって、ワイルドの喜劇などを耽読した。私は今でも、あの『アーネストが肝心』そのほかの四編の喜劇は正に天才の作品であって、名ばかり高いドリアン・グレイの絵姿などより遙かに上等だと思っている。

ノウゼンハレンは朱、橙、黄の色とりどりの花を咲かせ、辺りには絶え間なく、微かな虹の翅音が聞えた。ワイルドから眼を放せば春の空に浮ぶ綿雲が見えた。それはまさしく、人生の取り留めのない楽しみであった。要するに、私は E. E. Boy であつたということである。

## 空と草と

富士山は、どこから見ても美しい。池大雅も葛飾北斎も、横山大観も、梅原竜三郎も、いろいろな富士山を描いた。田児の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ、駿河湾から眺めた富士は素晴しいが、反対側の山梨県から見た富士も、別の趣きがあるようだ。

甲斐がねや穂蓼の上を塩車

蕪村

この甲斐が根は富士山のことだと、私は思っている。山国の風景が見事に描かれていて、これは矢張り画家の句であると思う。だが、私の一番好きな富士は乙女峠から見た富士山である。

昭和のはじめの或る秋の晴れた日、急に思い立って唯一人、御殿場の駅から、乙女峠の細い坂道を昇った。峠の上から見た富士は、湖や山などの余計な添景は何もなく、それはただ胸のすくような、大様な姿であつた。金時山まで続く尾根の草原には薄紫色の松虫草が一面に咲いていた。

当時は不景気のどん底で、まして心理学のような浮世離れた学科を敢えて選んだ私などは、卒業後の見通しなどは全く立たない有様であつた。若いという字は苦しみに似ていると

いう、あの流行歌の文句のように、いつの時代の若者も、自分こそが最も苦難の時代に在ると思ひ勝ちである。私は松虫草の咲き乱れる草はらに、仰向けに寝転んで、澄み渡る秋空を眺めながら、鬱鬱と人生の行路に思いを致すのであった。

## 空

月天心貧しき町を通りけり

蕪村

蕪村の数多い佳句のなかでも、この句が特に好きである。

秋の句には違いないが、私にはどうしても冬に感じられる。

昔——五十年近くも前ならば、昔といつてもいいだろう

——大森海岸に沢田屋という、大変安い蟹料理屋があった。

渡り蟹——ガザミーの専門店で、店の裏には捨てた蟹の甲羅が見上げるような山になった。その頃の東京湾は渡り蟹の名産地であった訳である。暮も押し詰った寒い日であった。

この店からの帰りに、どう夜路を間違えたか、いつの間にか、見たこともない寂れた町外れに出た。歩いている私の真上には冴え返る冬の月があった。たゞ暗く、黒く、静まり返

っている両側の低い家並に挟まれた狭い路は、一筋に白じろと見通せた。海の近くらしく、路には無数の細かい貝殻のかけらが散り敷いて、月あかりに白く光って見えた。しんしんと沁み入る寒さのなかで、卒然と、私は蕪村の月天心を想い起した。

\*

\*

から鮭も空也の瘦も寒の中

芭蕉

狂句 木がらしの身は竹斎に似たるかな

芭蕉

狂句は前書か、句の冒頭かという議論を、どこかで読んだ記憶があるが、私には、どちらが本当でも構わない。この形の方が好きだけである。私も年をとった。人生の冬ともなれば、このような句に殊に心を引かれるようである。七十年の来し方を振り返れば、

月天心貧しき町を通りけり

闇夜でなかったのは仕合せであった。

(明星大学)